**新しい掟? 4/13/2017**

**ヨハネ13:1-17, 31-35 牧師　安達均**

皆様の心が主の愛で満たされますように！

 レントの中でも最後の受難週、そして受難週の中でも最後の三日間に入る。そこにはキリスト教の大きな意味を感じる。そして、私は自分の生まれ育った家では母方の祖母が、仏教徒でもあったため仏教との関連をも思い浮かべながら、この三日間を送るようになっている。あるとき、仏教の究極は何かというなら、空ということだといつの間にか学んだ。

（母は仏教を信仰する祖母のもとに育てられたが、キリスト教の大学に行き、父と結婚し、キリスト教徒となり、キリストの究極である「愛」とともに仏教の究極「空」についてもいろいろ思いをめぐらせて生きていることとも関係している。）

十字架に架かる前日の晩に、イエスは「新しい掟を与えると言われて、わたしがあなた方を愛したように、互いに愛し合いなさい」と話された。　「互いに愛し合うように。」という掟は、新しい掟なのだろうか。　もちろん皆さんの中には、ヨハネ13章を何度も読み、もうそんなことは知っているから、もう新しいという感じがしないという方はいるかもしれない。

ただ私が言いたいのは、そういうことではなくて、イエスが2000年前にこの掟を残されたとき、そもそもこの掟は新しかったのだろうか？　互いに愛し合うということは、イエスがこの世に登場した以前にも、基本的な掟ではなかっただろうかと私は思う。

弱肉強食の自然界においては、人類が互いに愛し合う、互いのことを思って守りあい、助け合い、集団生活を送らなければ、人類はそもそも存続できなかったのではないだろうか？　また紀元前1200年、3200年前になるがモーセが語った旧約聖書出エジプト記20章にはすでに十戒があった。

十戒の最初の三つの戒めは、神を愛するように。そして四つ目以降は、4:父母を敬うことからはじまって、5:殺す、6:姦淫、7:盗み、8:偽証の禁止、そして最後の二つは隣人の9:財産と10:家族を欲することの禁止。　言い換えれば、互いに愛するということではないのだろうか。　なぜ、イエスは新しい掟といわれたのだろうか？

イエスはこの掟を話す前に、一つの大切な行為をされているのと、もう一つとても大切な言葉は述べていると思う。大切な行為というのは、弟子たちの足を洗うという行為。他人の足を洗うという行為についてちょっと考えて欲しい。皆さんは私の足を洗いたいと思うだろうか？皆さんが現代どう思うかは横においても、イエスとともにいろいろなところを三年間くらい旅していた弟子たちの足は汚かったことだろう。現代のような消臭剤はなかっただろうから今の時代の私たちの足に比べて、さらに臭かったのではないかと思う。

それでも、リーダであるイエスが、弟子たちの汚い足を洗われた。３年間連れ添って同じ釜のご飯を食べたとはいえ、血縁関係もなく他人の臭い足でも、自分の弟子として愛して洗われる様子に、いわゆる無償の愛、親が子を愛するような、なんら見返りを求めない愛をイエスが顕され、その愛に倣って、弟子たちも互いに愛するようにと言われたと思う。

そうなってくると、この新しい掟でいう、互いの愛は、弟子たちが、そして、今その話を聴いている私たちが実践できるレベルではないような愛をイエスは求めておられるように思う。そもそもイエス様が弟子たちに話されていた愛というのは、人類が実現するのには難しい、次元の違う愛を話しておられたと思う。

イエスの言われていた愛で、すばらしい話だけど、とても実行はできないと思われる愛が思い浮かんでくるのではないだろうか。ルカの5章やマタイの6章では、イエスは敵を愛するように、また自分を迫害するもののために祈るように言われていたことを思い出す。イエスの言われる愛は、理想で、それは新しい掟だろうが、私たち人類は2000年前にイエスが言われたレベルの掟は実行不可能なのだろうか？

さきほど、イエスは、この「新しい掟」の話をする前に、大切な行為を実行していたのと、もうひとつ大切な話をしていたと述べたが、今日の聖書箇所の中で、まだ触れていない箇所に話したい。　「今や、人の子は栄光を受けた。神も人の子によって栄光をお受けになった。」とイエスは言われているが、いったいどういうことなのだろうか？

イエスが「人の子が栄光を受ける」という話の中には、イエスの死が暗示されていると思う。自分を迫害する者たち、それでも愛している神の被造物である子どもたちのなすがままに、イエスが自分自身を完全に空にする姿、そして、十字架上での死を暗示しているのではないだろうか。

そして、その人の子によって神も栄光を受けたと、イエスは言われる。　英語ではGod has been glorified in him. となっている。　そこには、in him, 人の子、つまりイエスの中に神がいて、人の子の栄光は、すなわち人の子に中に入っておられる神の栄光がある。

十字架の死に向かって徹底的に自分を空にするイエス。そこには、空にするがゆえに、神の愛、人間にはとてもできない愛が充満するスペースがある。人間でありながら、空であるがゆえに神の愛で充満して、無償の愛を実現するイエスの姿、そして、それは神の意志である、復活を果たすイエスが見えてくる。

これから聖餐式があり、そして、夜の礼拝になるがイエスが空になられたことを思い、この聖壇にあるものはすべて取り除かれる。イエスにならって、私たちも自分を完全に空にすることから、今年のレントの最後の三日間をはじめてみてはどうだろうか？　皆さんがこの聖壇に近づき、イエスの体と血をいただくときに、イエスの無償の愛で豊かに満たされますように。　アーメン。